

より感性的なものが理論的なものの裏づけになっていないと、ちゃんとした理論はでてこないみたいなどころがあると思うんです。そういうものを養うためにも広く読む、文学書も読む、そういう風なふくらみみたいなもの、その基礎は1・2回生時代しかないと思うのですね。本当いえば高校時代にそれをやるべきなんだけれど、それができなかったとすれば、せめて1・2回生の間で大いにやるということがないといかんと思うんですよね。植物でも決まっているでしょ、肥料をやる時が。やっても仕方がない時にやったりすると枯れたりしますからね。人間の育っている時もそうで、肥料をたっぷりやるとそれが全部こやしになって効く時と効かない時がある。大学の前半というのは、効く時だと思うんです。この期にいろんなことを経験し、悩み考えることがあるだろうけど、そういったことを経験していくなかで、人は成長していくと思いますよ。何やったってこやしになる時ってありますしね、失敗を恐れずにやるということが良いと思うんです。ただその時に、充分に考えて、理性的な論理というものと、感性的なものがくいちがわないようにしていかないと、とんでもない方向に走るから、その2つの理性と感性を共に完成させるような努力が一番大切なんじゃないかと思いますね。

京都大学教養部ロシア語担当 山口巖・助教授

「京都大学新聞」 1984年4月16日。

ロシア語の周辺*

文化を担う言葉

言葉というのは、それ自身意志を伝達するために一定の社会集団が生みだし、約束の総体にすぎないが、それは人間の意識と分かち難く結びついているから、人のありよう、あるいは存在そのものを決定することにもなり、民族の文化

*再録『京大サクセスブック'1991 京都大学を知る本』。ただし両方の文章に若干の出入りがある。従ってここに収録したのは出稿原稿である。

を生み出し、担う道具ともなる。

だから言葉は単なる記号の体系というに留らない。それはその言葉を担う民族の文化と歴史、その民族の成員の心の動き方に彩られている。

従って言葉を学ぶということは、このような文化や歴史、人々の行動と意識を学ぶことと、不即不離の関係にあると、言うことができよう。そしてそれは同時に自分達の言葉を客観的に眺め、自分達の言葉について反省するよすがともなるであろう。大学におけるいわゆる「第二外国語」の学習の意義の一つは、この点にあると考えられる。

言葉と民族との関係がこのようなものであるとすれば、学習者の属する民族とその言葉を有している民族との関係が、この言語の学習に一定の影響を与えて来たというのも、一面では無理からぬことであつたろう。

ロシアはRの音を語頭に持たないという日本語本来の性質から、「オロシア」とよばれ、素朴な心には何となく「オソロシイ」ものと思われ勝であつた。あるいはそう思うように仕向けられたのかも知れない。言葉はそういう呪術性も併せ持っているからである。現在でもロシア語は「アカ」の帝国の象徴として、これを学べば「アカ」くなるのは必然と信じられているふしがある。

そして北国のイメージ。それはスターリンの粛清のイメージと重なって、なんとなく暗い、陰惨な感じを、ロシア語に与えつづけている。その際明治以来、トルストイ、ドストエフスキー、ツルゲーネフなどの文豪の作品があまたの知識欲に溢れた青年達の心を動かし、豊かにし、育んで来たことを、なぜ人は想わないのであろうか。あるいはスターリンの方が、トルストイより偉大であつたせいなのであろうか。訝しむべきことではある。

しかし、最近のソヴェト及び東欧の激しい変化の結果、今後は事情が余程異なってくると予想され、また期待もされる。

我国によく知られたこれらの作家達の外にも、たとえばロシア文学の父と謳われた天才プーシキンをはじめとして、レールモントフ、ジュコフスキー、チュッチェフ、フェト等々、秀れた作家達は枚挙に遑がないほどである。またごく最近物故したショロホフをはじめとするソヴェト期の作家達の作品にも、秀れたも

のが尠くない。

自然科学の分野においても、現在さまざまな研究がロシア語で発表されつつあり、その質においても見るべきものがあると聞く。その将来については、たとえばこの分野におけるかつてのドイツ語の栄光に比肩し得るものとなり得るかどうか、未だ確たることは言えない。ただソヴェトの学者達が研究に傾注するエネルギーには巨大なものがあるということだけは、言うことができそうである。

ロシア語の重要性

さて、ロシア語はインド・ヨーロッパ語族の中のスラヴ語派に属する一言語である。スラヴ語派は更に東方群と西方群及び南方群の三群に分たれるが、ロシア語はウクライナ語、白ロシア語と共に東方群を構成し、西方群に属するチェコ語、スロヴァキア語、および南方群に属するブルガリア語、セルボ・クロアチア語などと近縁である。宗教的には本来ギリシア正教に属し、ビザンツの文化的影響が今なお濃厚である。独特のキリル文字は、ギリシア語のアルファベットに範を取ったものである。

スラヴ諸国は言語的には概して保守的で、インド・ヨーロッパ祖語の古形を比較的よく保存している。ロシア語も動詞の変化形式こそ単純化したのが、名詞の変化はなお保存が良好であって、未だ6格を保持している。また形容詞は3性を保存し、分詞に当る形も極めて豊富であって文章法に独特の立体的性格を与えている。

音韻の面でもスラヴ諸語は概して保守的であるが、フランス語などの属するロマンス諸語や、ドイツ語などのゲルマン諸語とは異った方向を辿ったために、ロシア語の単語は初学者にとって一見馴染みのない、覚えにくいものと感じられる傾向がある。

このような言語的特徴もあって、ロシア語の学習はむつかしいという俗信があり、ためにロシア語の学習者は、その現実の必要性にもかかわらず、全国的に未だ極めて少い水準にとどまっている。しかし学習者が少いだけに、ロシア語を習得することの意味は却って大きいとも考えられよう。

学習の困難について言えば、最初の段階に注ぐことの必要なエネルギーは比較

的大であると思われるが、形態論が完備しているために、ある程度学習が進めば、他の言語と特に異なるほどのむづかしさを感じることはないと思われる。

また既に述べたように、ロシア語と他のスラヴ諸語との関係が比較的近縁であることから容易に察せられるように、これらの言語を学ぶ必要が生じた時には、ロシア語の知識の有無は、極めて大きな意味を持つことになる。従ってロシア語の学習は大きくいってスラヴ世界への鍵を提供するものであるとすら言うことができよう。

何れにせよ長期的に見れば、海をへだてて接するロシアの国とその民族の重要性が、我国にとって益々大きくなっていくであろうことは、想像に難くない。この国に対してどういう立場をとるかは別にして、ロシア語の重要性もまた決して減少することはないと考えられる。できうるならば早い時期に学習されることを、勧めたいと思う。

(山口巖氏は教養部助教授)

UNIV. COOP No.155 (全国大学生生活協同組合連合会機関紙) 昭和60年6月15日。

わが街 わが大学 わが生協

「古都の薫り豊かな大学生協」

都の「東北」にあった我が京都大学の界限も、北白川から北大路と街がひらけるにつれ、何時しか中心に近くなってきた。それでも、仰ぎ見る如意ヶ嶽の景観ばかりか、吉田山の麓にひっそりと佇む屋並みも、昔とちっとも変わっていないように見える。学生の頃、ポケット瓶を忍ばせて散歩した真如堂の辺りを通りながら、あの窓には誰それが下宿していたものだと言ひ合う楽しみも、未だ残されている。道端に崩れた土塀や木のうろなどのそのままのものをみつけたりすると、何かしら訳もなく感動し、その風景の中の、自分ばかりが変わり果てて終